

## 『難後拾遺』の意味

渡 辺 輝 道

『袋草紙』の「故撰集子細」に、「後拾遺集」の成立に関する記述があるが、その中に、

于時<sup>レ</sup>有難後拾遺<sup>ト</sup>云物。世以称<sup>レ</sup>経信之所為。通俊見之云々。先以件集内々令見合彼卿之處、神妙之由侍、而後日有此難、更不誤云々。<sup>(1)</sup>

『難後拾遺』が源経信によって著されたという世評があること、通俊は、それ以前に『後拾遺集』を経信に見せ、「神妙」の評価を受けていたが、その後この難が出て、通俊はまた集に改訂を加えたことを述べる。

上野理氏は、『後拾遺集』の成立が、草稿本→奏覧本→再奏本という過程を踏んだことから、草稿本の段階で、再者の間に「後拾遺問答」があり、その後、奏覧本の定稿が出来たところで、経信の意

見を求めたところ、「神妙」の評価を受けて、応徳三年（一〇八六）一〇月中旬に奏覧を得るが、その奏覧本に対して『難後拾遺』が著され、それによって、通俊は、今一度奏覧本を刪定して、翌寛治元年二月の再奏本召見になったと推定される。<sup>(2)</sup>

「後拾遺問答」は、今日、逸文としてその一部が窺えるだけだが、正確に逸文といえる七首についての問答の後、三首が『後拾遺集』に不掲載となっているところからも、通俊が、撰集に際して、経信の批評を強く意識していたことは間違いない。そして、奏覧本の定稿が出来て、再度意見を求めたところ、「神妙」の評価を得たのだった。

『袋草紙』の「而後日有此難、更不誤云々」について、小沢正夫氏は、<sup>(3)</sup>「更にその難をとり入れて手なおしをし、誤りなきを期した意か」（傍点筆者）とされるように、この記述には問題がある。文脈としては、先に「神妙」と答えながら、「難」を表したものであるから、そのことに対する意見があつてしかるべき部分で、

「更不審」とでもあれば、落着く。しかし、現存『袋草紙』に異文がないところから、小沢氏らの解釈を妥当としなければならぬが、文脈として、藤原清輔に経信の行為をいぶかるところがあつたことを読みとつても誤りではないであらう。

『難後拾遺』を経信の「所為」とする、もつとも有力な根拠は、右の『袋草紙』の記述であるが、また、その「雑談」には、

又難後拾遺ト云物アリ。世以称経信卿之所為。而近年俊頼朝臣息子僧俊恵相語云、吾妹女房逝去之後、彼遺物ヲ開見之所、故頭遺草少々、其中有件難後拾遺之草案。故頭之手跡也。若彼所為歟云々。予按之若以帥口狀執筆之間草歟。

右の記述があつて、経信の孫俊恵の話として、妹の遺物の中から、父俊頼の筆跡の『難後拾遺』の草稿が出てきたので、俊頼がその作者ではないかと語つたというのである。清輔はそれに対して、経信の口述を俊頼が筆記したものではないかと、あくまで経信作者説を譲らない。

奏覧本の定稿を見て「神妙」と答えながら、そのすぐ後に、『難後拾遺』を表した経信の行為の不自然さ、その真意を測りかねて、早くから、その作者を経信とすることに不信があつたことを窺わせるのである。

しかし、上野理氏は、『難後拾遺』の記述内容からみても、当時、それを書ける者として、経信以外は考えられないとされる。経信以外を作者とする異説も、現在まで見当らない。筆者も上野説は

肯定すべきものと考える。

## 二

『難後拾遺』は、次の記述によつてはじまる。

後拾遺とて此比世にかきさはぐ集ありとて、人のもたるを、いとまのひまに人によませて聞きつれば、いとをかしうおぼゆる歌もあり、又、如何あらんとおぼゆるもあれば、是をかきいだして、それはさぞといふ人あらば、げにとと思はんとなり。(傍点筆者)

執筆意図を述べているが、「人によませて聞きつれば」と『後拾遺集』を自分で読むのではなく、聞いている点が注目される。現存『帥記』は、応徳三年から寛治元年の部分で、正確は期しがたいが、寛治二年の記述からも、経信に眼疾等の特別の事情を推測させるものはなく、七十二歳の高齢ではあつたが、読むことに支障があつた訳ではないであらう。とすれば、経信には、和歌は耳で聞いて享受されるべきとする考えがあつたと推測される。以下、『難後拾遺』の各難について検討していくが、まずその前提として、経信が各歌を聞いて鑑賞しているという点に留意しておく必要がある。

『難後拾遺』は、八四首の歌をあげるが、その中、八二首について、論難を展開する。その難は多様であるが、難の主題によつて、それらを分類すると、九類に分けることができる。歌によつては、

難点が二、三類に亘る場合もある。(引用例の冒頭の算用数字は、

『難後拾遺集成』が付す歌の通し番号である。詞書、作者名の引用は、必要に応じて処理している。)

(1) 入集を不適とする難

49

道綱母

消え返り露もまだひぬ袖の上にけさは時雨の空もわりなし

わりなしといふことの、さらなることにて、上手の歌ともおぼえぬなり。

難の対象となっている八二首は、いずれも入集に疑義がある歌ということになるが、難点が特に詳述されず、入集に疑問が呈されている歌や、他の難点を指摘されながらも、歌の出来を酷評されているものを、この類に入れる。

58 君こふる心はちぎにくだれどひとつもうせぬ物にぞ有ける

此歌はちぎにといふに、ひとつといへるをこそことにて有るにや、いとみぐるしき歌かな。ひとつもうせずとあるは、何事のあればと云ふ事ともみえぬは。

『千々に』と「ひとつ」を技巧的に詠みこむことをねらったため、表現に無理があり、「ひとつもうせぬ」の意味が明確でないという表現の不備を指摘し、「みぐるしき歌」と酷評する。

58 が趣向を凝らして破綻を招いた例とすれば、次の例は、無趣向であることが難の対象になっている。

69 おもひきや秋の夜風のさむけきにもなき床にひとりねんとは

いみじうたゞありにて、思ふたる所もなうおぼゆるかな。

口にまかせて詠んだもので。深く考えをめぐらしたものではないときめつける。勅撰集に入集するような歌は、それなりの趣向がなければならぬというのである。

この類に入る歌は一〇例ある。

(2) 誤りを指摘する難

4 ふりつらむ雪消えがたき山里に春をしらす鶯の声

此歌はもし書きたがへたるにやあらん。ふりつらんは、もしふりつめるか。

経信がこの時用いた本には、「ふりつらむ」とあったのである。流布本『後拾遺集』はみな、「ふりつめる」となっているから、経信の指摘によって、再奏本で訂したと上野理氏は考えられる。どちらにしても、この指摘は、聞くことによって、その表現の不自然さがより鮮明に気づかれたと考えられる性質のものである。

この類に入る難の主力は、経信の長い歌壇活動の中での体験に基づく、集の記述の誤りの指摘である。

41 父のともに越後にまかりけるに、あふ坂の関をこえて、為

善がもとにつかはしける 惟規

相坂の関うちこゆるほどもなくけさは都の人ぞ恋しき

まづはとこそきゝ給へしか。さてはまさるらんものを。これは為善が語りしは、のぶのりが此歌をよみておこせて侍し、今にうしなはで侍とこそ申しりしか。

「けさは」とあるのは、自分が聞いたのでは「まづは」であつたと、歌としてその方がすぐれていることをいうが、歌の受手であつた爲善自身から、前後の事情まで聞いたとする説明は、説得力をもつ。

この類のものは、一〇例を数える。これらに対しては、撰者通俊も抗弁の仕様はないものであつた。

(3) 歌題とのずれを指摘する難

34 客依月来と云心を

公実卿

わすれにし人も問ひけり秋の夜は月いではとこそ待ばかりけれ  
此歌の心は、客依月来といへば、月のあかきに諸共にみむとて人の来なり。江侍従といひし女房の、

月影は山のは高く成にけりいではといひし人につげばや  
とよめりし歌は、いではといふ事を心ばえある事にて有るを、言も心もかはらざらんはいかが有るべき。又、あの歌はよみよし、これはいではとこそといふ所いとよみにくし。文字あまりたる古歌もあれど、すべらかによまれつゝこそ有様におぼゆれ。又、題には、ちぎるともなうて月に人のきたるらんこそ、いうにもあらめ、月いでんをりを契たらんは、月に思出てきたらんには、おとりやすらん。

「客依月来」という題は、「ちぎるともなうて」美しい月を共に楽しもうと友を思い出して尋ねて来る心を詠むもので、よい月が出たらと約束していて、その月の出た時の心を詠むものではないという。

歌合、歌会が盛んに催されるようになった後拾遺集時代、歌題をどのように解釈し、趣向をめぐらすかは、詠作法の焦点であつたのである。公実の歌は、その歌題の心の捉え方に難があることを指摘する。

この類の例は、贈歌の心をうまく踏まえていない返歌の難を含めて、七例ある。

右の例は、また、

(4) 歌の模倣に対する難 をもいう。江侍従の「月影は」歌と言葉も心も同じ、模倣歌であると非難する。

この模倣の問題は、そのころから盛んになりはじめた本歌取りの技法に深くかわる問題であつた。

7 正月七日、周防内侍のもとにつかはしける 藤三位

数しらずかさなる年を鶯の声する方の若菜ともがな

貫之が歌に

つみたむることのかたきは鶯の声する方の若菜なりけり  
とよめるは、若菜つみに野に出たるに、鶯のこゑする方をきく程に、若菜をつみためぬとあるこそ、いうにはあれ。こゝにはかれをとりて、声する方とよみたるが、さるべしともおぼえぬなり。彼歌を本の歌によみたるは、かゝる証歌あらむや。

経信は「数しらず」歌が貫之の歌を本歌とすることを指摘し、後者を「いう（優）」と高く評価する。その理由として、貫之の歌が理詰

で表現として不足するところがないことをいう。一方、藤三位の歌は、下三句が貫之歌をほとんどそのまま引用しながら、上二句との意味のつながりに飛躍があることをふまえてであろう、「さるべしともおぼえぬなり」と批判する。藤三位の歌は、貫之歌を添えることによつてはじめて、歌としての意味表現が完結するという弱点をもっているのである。新古今時代の本歌取り技法の完成期のそれと比較すれば、技法として初期的な段階の姿を示すものといえよう。ただ、「彼歌を本に歌にてよみたるは、かゝる証歌あらむや」というのは、経信自身、この本歌取りについて、定見を確立していないことを示すものといえようか。この類の難は一〇例と多い。

34の例はまた、いま一つの難を含んでいる。

(5) 調べが整わないことの難

「わすれにし」歌の「月いではとこそ」が字余りになっていて、「いとよみにくし」と、調べが「すべらか」でないことをいうのである。江侍従歌は、初句に「月影は」とあることから、四句では「いでば」だけで表現として不足はない。しかし、公実歌は、上に「月」がないため、四句で「月」を入れざるをえない訳で、しかも江侍従歌の「いでば」を踏まえての詠作であるから、必然的に「月いでば」という表現になって、字余りを生んだものと考えられる。この難も、歌を聞いていることから強く意識されたものといえよう。

5人はみな子日の松を引きに行くけふの若菜は雪やつむらん

此歌は、若菜は雪やつむらんといへるはおかしきやうなれど、引きに行くことと有るこそすべらかにおぼえね。おほよそおさなげなり。

「引きに行く」が「すべらか」でないことをいう。歌語として洗練されていない用語であるというのであるが、イ音の連なりが耳ざわりであることもいうのであろうか。これも耳で聞いていないと気づきにくい難といえるであろう。

この類の難は、三例であるが、引用しなかったいま一例も、字余りを指摘している。

### 三

『難後拾遺』が指摘する難の主力は、表現に関するものである。その中でも、表現の不備、不適切をいうものももっとも多い。

(6) 表現の不備、不適切を指摘する難

1 天曆三年太政大臣の七十の賀し侍けるに 能宣

たづのすむ沢辺の芦の下根とけ汀もえいづる春はきにけり

これ上手の歌と書付けられたれば、いとおそろし。仰ひで信ずべけれど、沢辺ということと汀といふことは、同じこととなる上に、汀にもえいづるところそいふべけれ。汀もえいづるとあれば、に文字入るべうこそ覚ゆれ。

前半は、「沢辺」と「汀」とが、同心病であることをいう。そして、「汀にもえいづる」と「に」が必要であると主張する。藤本一

恵氏は、

「汀萌えづる」は、当時としては、じつに大胆で清新な表現であった。「汀」が燃えるようではない、<sup>(7)</sup>「に文字」を入れよ、という経信難は理におちてはいまいか。

と述べられる。経信が字余りを気にすることは前述したが、ここでは「汀もえいづる」がすでに字余りであることに触れず、さらに「に」が必要であるという。「汀がもえいづる」ともとれる不安定な表現であるというのである。誤解を生じたり、意味がとりにくい表現は、経信にとって見逃せない問題であった。

表現の不備という難では、しばしば「おぼつかなし」の評語を用いる。

57 たぐひなくうき身なりけり思ひし人だにあらば問ひこそはせ  
め

是は恋か何事ぞ。もし、人だにあらばと云事は、おほかたの事か、いとおぼつかなし。

これは(3)の難の例としても該当するが、撰者は、「たぐひなくうき身」を恋ゆえのものとして、恋部に入れたと思われる。しかし、経信は、「人だにあらば」の「人」が恋にかかわる特定の人を意味しないのなら、恋歌とは決められないと、表現の不備を指摘する。

難の対象になった八二首の歌の約半分、三八首が恋、雑の歌であるが、そのほとんどに対して、表現の不備、不適切の難をいう。主情性の強い恋、雑歌は、本質的に「心あまりて詞たらず」になる傾

向があるが、表現の厳密さを重視する経信とすれば、それは許容しがたい問題であった。

64 齊信民部卿の女にすみわたり侍ける、かの女身まかりにければ、法住寺と云所に侍けるに、民部卿長教

もろともにながめし人も我もなき宿にはひとり月やすむらん  
題はいと哀なり。又、いはれぬにもあらず。但、われもなきや、やすらかなからん。

「ながめし人」については、「なき」は死んだことを意味することから、「われもなき」とすることは不適切で「やすらかなからん」ということになる。適切な指摘である。この難の延長に、歌の用語として禁詞の問題が出てくる。

この類の難は四五例、難例の半ば以上を占める。

(7) 禁忌の用語に対する難

17 後冷泉院の御時、うへのをのこども花見にまかりて、歌な

どよみて高倉一宮の御方に参りたりけるに

一宮駿河

思ひやる心ばかりは桜花尋ぬる人におくれやはする

歌の心はいはれたれど、人におくるといふ事は、まが／＼しき事と思ひならはしたれば、いと晴に出さん歌にては、いかゞ有べからん。

「人におくる」という用語が、不吉な意味をも表すとして、晴の歌の表現としては避けるべきだという。ここでの「晴に出さん歌」と

は、勅撰集を晴の場と捉えて、それに入集させる歌のことをいっているとして理解してよいだろう。

16 おらでたゞかたりにかたれ山桜風に散るだにをしき句を

(前略) 又、かたりにかたれといへるも、たゞ人の物いふやうにこそおぼゆれ。

「かたりにかたれ」が俗語的表現であることをいう。これも晴の歌の表現というものを強く意識しての難である。俗語的表現を厳しく否定する経信の立場からすれば、禁忌といってよいものと考えて、この類に入れた。

(6)の難の例に引いた「汀もえいづる」といった新鮮な表現と同じく、撰者通俊は、俗語的表現でも「めづらし」と評価できるものは、積極的に採用しようとしたふしが認められるが、経信は、それにことごとく難をあげせる。この類の例は、八例を数える。

(7)の難では、新しい表現を求めて、時に俗語的表現をも許容しようとする動きを厳しく批判する、保守的な経信の姿が窺えたのであるが、それは、三代集時代に定着した伝統的な発想や歌語の意味、イメージを本意として尊重する姿勢となつて現れてくる。

(8) 本意の逸脱に対する難

2 春立ちてふる白雪を鶯は花ちりぬとやいそぎいづらん

鶯は、春、花のをりなくものなれど、もと花によりてなん谷より出づるなどいふことのあらばこそ、かうはよまめ。されば、本の心にはあらずきこゆるは、いかゞ。

鶯が花にもよおされて谷から出てくるというのは「本の心(本意)」としてはないとして、この歌の、降る雪を花と誤つて谷から出てくるという趣向を否定する。

24

兼房朝臣

夏の夜はさてもやねぬと時鳥二声きける人にとはゞや

一声といふ事は、よるほのかに鳴わたる物なれば、むかしの人のよみつたへたるなり。二声きかばあかれぬべければや。二声をきく人にとはゞやなどは有りもやせん。是はいといはれもなき歌かな。

兼房の歌は、あえて「二声」というところに眼目があるのだが、経信は、時鳥の鳴き声は一声と詠む伝統を尊重する立場から、「いはれもなき歌かな」ときめつける。

この類に入る例は九例あって、経信の伝統尊重の頑なさを示す。

(9) 歌病に対する難

『孫姬式』以来、歌病は難として公認のものである。これに当たる例は、同心病を指摘する二例だけである。その一つは、(6)の難の例1として前に引いた。

53 わすれなんそれも恨みず思ふらん恋ふらんとだに思ひおこせ

よ

恋ふらんとよまれたる上に、思ふらんとある言こそあまりにたれ。恋ふらんこそ思ふらんにはあらめ。もし同じ事を云ふにては、すゑの思ひと云ふ、同じ事にはあらずや。



「思ふ」「恋ふ」「思ひ」と重ねて、同心病になっていることを指摘する。同心病は歌病の中でも重い病とされたから、だれもが注意したことであつた。「わすれなん」歌は、それを逆手にとって意識的に詠作したと考えられ、通俊も評価したのだが、経信は認めなかつたのである。

#### 四

八二首の歌を対象にして展開される『難後拾遺』の多様な論難を、難の主旨によって、九類に整理し、それぞれについての例を検討することによって、経信の意図の輪郭を捉えようとしてきた。そこに認められたのはまづ、経信が歌に対するとき、その評価座標の原点に「晴の歌」のイメージが置かれていたことであつた。経信が歌人として生きた時代は、和歌史はすでに、晴の歌の時代へと展開しており、彼は晴の歌の形成過程と共に歩んできたのであつたら、それは当然のことではあつた。そして、経信は三代集の伝統を重ね、王朝的美を「をかし」とする摂関家派の歌合、歌会に参加することによって、歌壇経験を重ねたのである。典型的には、そのような歌合という場において評価される晴の歌が、経信の評価座標の原点にあつた。経信が『後拾遺集』を「人によませて聞き」ながら、各歌を評価していったのは、まさに、講師によって披講される歌を聞いて、その優劣を判定する歌合の場の歌の享受の仕方に倣つたものだったと考えられる。

勅撰集に対して和歌史上はじめて難が著されたことについて、上野理氏は、「当時は批評の流行した時代だ<sup>(8)</sup>」として、『承暦二年内裏歌合』で激しい難陳が出たことを指摘される。経信はこの歌合に深くかわつていたので、この歌合での難陳は『難後拾遺』を著す際、経信の頭に思い出されていただろうことを推測してよいだろう。そこで『承暦二年内裏歌合』の難陳を、前に述べた『難後拾遺』の(1)～(9)の難に対応させて、点検してみる。(1)(2)の難は、その性質上、対応する例は当然ない。

(3)の難に対応する例

六番 菖蒲 左

あやめぐさなにのたれしにひきそめてかゝらぬやどのつまなかるらむ

師賢「菖蒲にはあらで、恋にてなむある。」

十五番 恋 左

わたつみにみるめもとむるあまだにもちひろのそこにいらぬものかは

右の人「左の歌はいつこに恋はあるぞ。」

(4)の難に対応する例

二番 霞 左

たにがはのおとはへだてずまがねふく吉備の中山かすみこむれど

右の人々「〔谷川の音〕とよみ〔真金ふく吉備の中山〕とい



へれば、古き歌の残りすくなかなり。」

十三番 雪 左

ふるゆきのひかずつもれば信楽のまきのあをばもみえずなりけり

右の人「(略) これは、「松の葉白き吉野山」といふ歌を詠めるにこそ。」

(5)の難に対応する例

十一番 鹿 左

ゆふぐれは小野のはぎはらふくかぜにさびしくもあるかしのなくなる

右人「歌は文字つかひをこそいへ。「もあるか」といへるわたり、いと惜さげなり。」

(6)の難に対応する例

五番 藤 右

みなそこもむらさきふかくみゆるかなきしのいはねにかゝるふぢなみ

実政がいふやう「「影映る」といはでは、いかでか「水底紫深き」とは詠むべき。」

(7)の難に対応する例

三番 鶯 左

としをへてきけどあかぬはわかやどのはなにこづたふうぐひすのこゑ

「「わが宿」とは内裏にては詠まぬ言なり」と難ずれば、：

十二番 紅葉 左

ふくかたにちるもみぢばのしたがへばうらやましきはこがらしのかぜ

「(略) 又、「従へば」と詠めるも、無下に歌の詞ともおぼえず、強げなれ。」

(8)の難に対応する例

四番 桜 左

たづねこぬさきにはちらでやまざくらみるをりにしもゆきとふるらむ

右の人々「「さきには散らで」とあるは、花を無下に惜しむ心なし、散らさであらむこそ本意なれ。」

九番 七夕 左

いづれをおもひますらむたなばたはあふうれしさとはぬつらさと

顕綱「織女は七日をのみよむものなり。(略) 「逢はぬつらさ」とは、六日の日よりさき、八日の日より後の歌か。」

(9)の難に対応する例

二番 霞 左

たにがはのおとはへだてずまがねふく吉備の中山かすみこむれど

俊綱「この歌は、まづさりどころなき病あり。隔つ・籠むと

いふは、義の病あり。」

『承暦二年内裏歌合』の、右方の人の手になると考えられる記録、廿卷本模本によって、点検したものである。十五番三〇首の歌について、その難陳が記されているが、右に示したように、そこには『難後拾遺』でみられた主要難点がすべてみられるのである。経信はこの歌合で、左方の歌の撰者になり、自ら代作して四首を<sup>(10)</sup>提出している。実質上左方のリーダーであった。この歌合で前例をみない激しい難陳の応酬があった背景には、親政を実現しようとする白河天皇を中心とする勢力と摂関家派との政治上の葛藤、それと連動しての歌壇での天皇近臣グループ（歌合の右方を構成）と摂関家派の経信を中心とする宇多源氏流（左方を構成）との主流派争いなどが指摘される。この歌合の勝負は、右方の激しい難陳にもかかわらず、歌合の伝統に従って、判者源頭房によって、最終的に左方の勝ということになったのだが、経信には、この歌合の体験は、にが／＼しい思い出となって残ったであらう。

## 五

第四番目の勅撰集は、白河天皇近臣グループの中心であった藤原通俊に命が下って、『後拾遺集』として、世に現れてきたのだった。勅撰集という晴の場に位置を与えられる歌のあり様については、晴の歌の形成期をつぶさに体験してきた経信に、期待されるイメージがあったはずである。晴の場の典型である歌合の場に倣って、人に

歌を読ませながら、『後拾遺集』の歌を一首一首吟味していくにつれ、自分の期待を裏切る歌々が耳につきはじめたのだ。その時、『承暦二年内裏歌合』での通俊たちの難陳が思い起こされたと思像してもよいが、少なくとも結果としては、その時の右方が展開した論難を逆手にとった形で、後拾遺集歌に対する論難が展開され、『難後拾遺』が著されることになったのである。

『難後拾遺』の基底をなしたのは、歌合の歌論であった。岩津資雄氏によれば、歌合歌の特質は、「題詠歌」「晴の歌」「口誦歌」の三点に要約されるといわれる。<sup>(11)</sup>上野理氏は、経信の歌の分析を通して、その詠作法を、

歌題の題意を正しく理解し、現実在即したかたちをとりつつ、本意にそって題意を再構成し、晴の歌の禁忌に違反せずに平明に過不足なく描写し、高い声調を獲得しようとする。

とまとめられる。<sup>(12)</sup>これはまさに、歌合歌の特質を踏まえ、それを理想的に具現化しようとする詠作法である。経信の歌論は、歌合の歌論にそのまま重なって、矛盾がないものであった。

『後拾遺集』が築いた和歌世界の全体像の解明は、今後の課題であるが、少なくともそれが、歌合の歌論によって完全に裁断しうるような単純構成の世界でないことは、確かである。『難後拾遺』には、はじめから限界があったのである。『難後拾遺』が対象とした八二首のうち、歌合、歌会などの晴の歌と確定出来るのは、一二首、恋、雑歌にはそれはない。恋、雑歌についての難が、ほとんど

表現の不備、不適切に片寄ったのには、理由があったのである。

嘉保元年（一〇九四）八月十五日に、前関白藤原師実が高陽院において歌合を催している。その時、一番右歌を提出したのは通俊であった。

一番 桜 右

中納言通俊

はるかぜにふくともちるなさくらばな花のこゝろをわれになし  
つゝ

この時の判者は経信である。その判詞は、

右の歌の「花の心」と詠まれたるは、花は心やは侍らむと思ふ  
給ふれば、左はなほまさりたりとや申すべからむ。

「花の心」は通俊腐心の表現であったと思われるが、経信は、それ  
を負けの理由にしたのだった。両者の和歌理念には、鋭い対立があ  
った。

『難後拾遺』によって撰者通俊が訂した箇所は、数力所であつ  
た。

注(1)『袋草紙』本文は、『袋草紙注釈』（小沢正夫ほか 塙書房）

によった。

(2)『後拾遺集前後』第六章（笠間書院）

(3)注(1)に同じ。

(4)『難後拾遺』本文は神宮文庫本（『難後拾遺集成』（関根慶

子 風間書房）所収）による。ただし、誤りと思われること

ろは、竜氏旧藏契沖本、清水浜臣校本（ともに前掲書所収）  
八代集全註本によって訂し、また、表記は私に訂し、句読点  
を施している。

(5)厳密には、応徳四年四月七日の、改元に当っての元号案につ  
いての記事が、一日だけ残る。

(6)注(2)に同じ。

(7)『後拾遺和歌集(一)全訳注』（講談社学術文庫）

(8)注(2)に同じ。

(9)『日本古典文学大系「歌合集」』（萩谷朴校注、岩波書店）の本  
文による。

(10)『後拾遺集前後』第三章

(11)『歌合せの歌論史的研究』（早稲田大学出版部）

(12)注(10)に同じ。

（高知大学教授）